本学における不本意入学者の特徴：
東北学院大学新入生意識調査の分析

神林　博史

1. はじめに

本学では、新入生に対し「東北学院大学新入生意識調査」（以下「新入生調査」と略）を実施している。この調査は「新入生のみなさんを指導するうえで、あるいは入学者を募集する際の参考資料や広報活動の充実のために」（2013年度「東北学院大学新入生意識調査」調査票の説明文から抜粋）行われている。

とはいえ、筆者が知る限りでは、新入生調査データが十分に分析・活用されているとは言い難い。少なくとも、学生指導面に関してはそうである。

本稿では、2011年度から2013年度までの新入生調査データについて基礎的な分析を行い、本学に入学した学生の基本的な特徴を把握する。ただし、後に説明するように新入生調査では様々な項目が質問されており、それらを全て分析することは論点の拡散を招き、煩雑でもある。そこで本稿では一つの試みとして不本意入学に注目し、この問題に限定して検討を行う。

大学生の学生生活不適応は、長期欠席・休学・留年・退学を引き起こす原因となるため教育上の大きな問題であるだけでなく、経営面においても重要な問題である。ベネッセ総合教育研究所が行った「第2回大学生の学習・生活実態調査」（2012）データの分析によれば、「他の大学に入りなおしたい」（転学意向）あるいは「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」（退学意向）と考えたことのある大学1年生の比率は、前者が約40%、後者が約17%であり、この比率は大学の偏差値が低くなるほど高くなる傾向にある（樋口2013）。こうした転学意向・退学意向の背後にある理由は多様であるが、特に重要な理由の1つが不本意入学であることは、容易に想像がつくだろう。実際、樋口（2013）は転学意向の理由の1つとして不本意入学をあげている。

それゆえ、不本意入学者が新入生の中にどの程度存在するのか、彼ら／彼女らが大学生活にいかなる展望を抱いているのか・いないのかを把握することは、東北地方あるいは全国の大学の中での本学の立ち位置を考えたときに、重要な課題と言えるだろう。

2. 新入生意識調査の概要

本学の新入生調査は、4月初旬の新入生オリエンテーション（原則として全員参加）におい

て実施される。したがって、新入生の全数調査と言える。調査方法は配票自記式で、新入生に調査票（マークシート式）が配布され、その場で回収される。調査票はA4用紙で4ページ分あり、ここ4年間は26問構成となっている。2010年度から2013年度までの調査票の質問項目をまとめたものを表1に示す。

表１　新入生調査の質問内容

質問項目	回答形式[1)]	2010年	2011年	2012年	2013年
1.　性別	単一	○	○	○	○
2.　入試方式	単一	○	○	○	○
3.　卒業年	単一	○	○	○	○
4.　出身高校所在地	単一	○	○	○	○
5.　自宅か否か	単一	○	○	○	○
6.　出身高校の進学校度	単一	○	○	○	○
7.　高校生活で特に力を入れたこと	多項(2)	○	○	○	○
8.　高校時代に学習していない科目	多項	○	○	○	○
9.　受験対象として意識した時期	単一	○	○	×	×
10.　受験を決めた時期	単一	○	○	○	○
11.　センター試験受験の有無	単一	×	×	○	○
12.　受験決定の際の情報収集	単一	○	○	○	○
13.　オープンキャンパスへの参加	単一	○	○	○	○
14.　受験の際に役に立った情報源	多項	○	○	○	○
15.　進学について相談した相手	多項	○	○	○	○
16.　本学の情報を見たメディア	多項	○	○	○	○
17.　本学を受験した理由	多項	○	○	○	○
18.　入学学科を受験した理由[2)]	多項(2)	○	○	○	○
19.　併願校	単一＋自由	第3志望まで	第3志望まで	第2志望まで	第2志望まで
20.　入学学科への入学満足度	単一	○	○	○	○
21.　大学生活で特に力を入れたいこと	多項(2)	○	○	○	○
22.　大学でできると思う勉強	多項(2)	○	○	○	○
23.　大学生活についての不安	多項(2)	○	○	○	○
24.　卒業後の進路についての考え	単一	○	○	○	○
25.　仕事を決める上で重視すること	多項(2)	○	○	○	○
26.　人生を送る上で重視すること	多項(2)	○	○	○	○
27.　東北学院大学のイメージ	自由	○	○	○	○

1）単一＝単一選択、多項＝多項選択、自由＝自由記述。多項（2）は選択肢を２つまで選択可。
2）学科によって選択肢の内容および数が異なる。

すでに触れたように、この調査は新入生の指導および広報の参考資料とすることを目的としており、調査内容は、(1) 基礎項目 (1〜8)、(2) 受験に関する項目 (9〜19)、(3) 今後の大学生活に関する質問 (20〜27)、の3種類に大別される。受験に関する質問の一部に変更があるものの、ほとんどの項目は4年間で共通している。

本稿では、教育研究所より提供された2010年度から2013年度までの4年分のデータのうち、2011年度以降の3年分のデータを分析する[1]。

3. 分析

3.1 不本意入学者はどれくらいいるか

不本意入学は、(1) 第一志望不合格型、(2) 合格優先型 (合格可能性を追求して受かりやすい大学に入学)、(3) 就職優先型 (自分の興味・関心よりも就職の有利さを優先して入学)、(4) 家庭の事情型 (「自宅から通学できる」「学費が安い」など地理的・経済的事情を優先して入学)、(5) 学歴目的型 (勉強には特に興味がなく、「親にすすめられて」とか「就職できなかった」といった理由で進学) の5つのタイプに分類できる (小林2000)。今回用いた新入生調査データには第一志望の大学に関する質問が含まれるので、これを用いて第一志望校不合格型の不本意入学を調べることができる[2]。

第一志望校は、「東北学院大学の○○学部××学科」(○○と××には新入生の所属する学部・学科名が入る)、「東北学院大学の他の学部学科」、「他の国公立大学」「他の私立大学」、「その他」の5カテゴリーで測定される。2011年度から2013年度までの第一志望校の分布を表2に示す。

表２ 入学者の第一志望の分布　　数値：%

	2011 年	2012 年	2013 年
本学（所属学科）	54.9	54.3	56.5
本学（所属学科以外）	5.5	5.8	5.1
他大学（国公立）	31.8	31.6	29.5
他大学（私立）	6.8	6.9	6.0
その他	0.1	0.2	0.2
無回答	0.9	1.2	2.7
合計	100.0	100.0	100.0
N	2984	2766	2810

第一志望の分布は3年間でほとんど変化がない。所属学科を第一志望としていた学生が55%前後、本学の所属学科以外の学部学科を志望していた学生が5%程度、国公立志望が30%前後、

他私大が6%程度となっている。これらのカテゴリーのうち、本学の所属学科を第一志望としていた学生以外を不本意入学者とみなすことができる。したがって、第一志望不合格型の不本意入学者の比率は約45%、残り55%が希望通りに入学した学生ということになる。

以下では、所属学科以外のカテゴリーを第一志望としていた学生を「不本意入学群」、第一志望が所属学科であった学生を「本意入学群」と分類し、主に前者の特徴を分析してゆく。

まず、不本意入学群した学生は特定の学部学科に多いのかどうかを調べてみよう。各学科における不本意入学者比率をまとめたものが図1である。

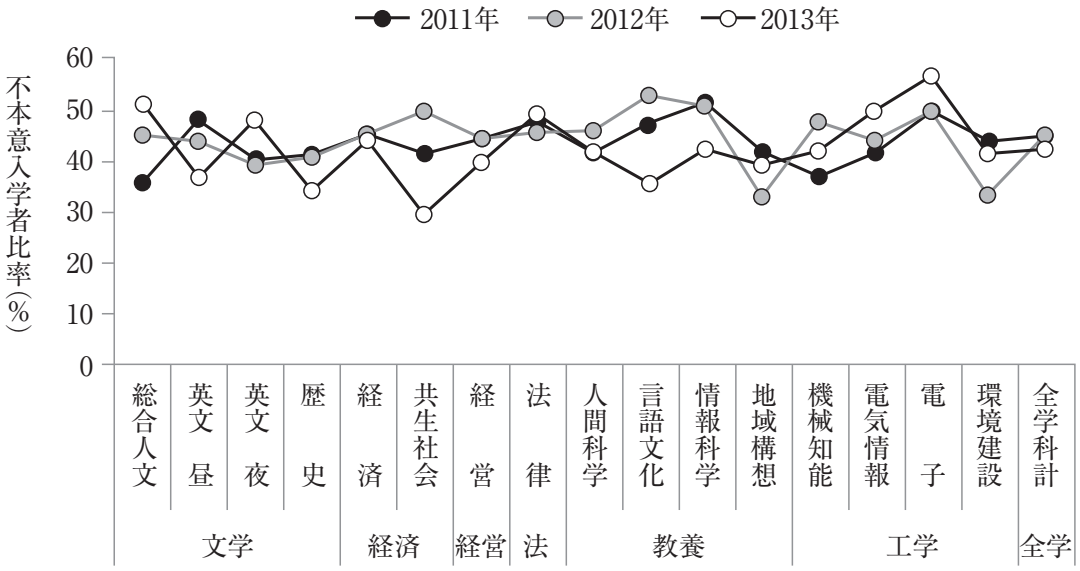

図1　各学部学科における不本意入学群の比率：2011-2013

不本意入学者の比率は学部学科および入学年によって変動しており、明確な傾向は見られない。言い換えると、ある特定の学部学科に不本意入学者が多いといった傾向は、この3年間では存在しないようである。

3.2　どのような学生が不本意入学するのか

次に、どのような学生が不本意入学群になりやすいのかを検討しよう。まず、入試方法別の不本意入学者比率を確認する。本学の入試方法は多様であるが、定員の少ない入試方式は「その他」としてまとめ[3]、7カテゴリーに分類した。入試方法別の不本意入学者の比率をまとめたものを表3に示す。

表３　入試方法別不本意入学者比率　　数値：%

	2011 年		2012 年		2013 年	
	不本意%	%の基数	不本意%	%の基数	不本意%	%の基数
AO	8.0	348	4.2	359	7.4	367
学業推薦	9.9	487	12.7	424	9.2	584
スポーツ推薦	16.2	117	15.2	105	11.7	111
TG 推薦	7.7	207	10.3	204	10.9	201
一般	65.1	1371	64.9	1196	67.3	1001
センター試験	84.8	330	86.7	368	86.6	380
その他	35.4	96	36.8	76	9.1	55
合計	44.6	2956	45.0	2732	41.6	2699

表の数値は、各入試方法に占める不本意入学者の比率を示す。たとえば、2011年の一般入試の不本意入学率は65.1%だが、これは2011年に一般入試で入学した学生1371人のうち、65.1%が不本意入学であったことを意味する。

不本意入学者比率が特に高いのは一般入試およびセンター入試で、これは当然の結果であろう。また、推薦系の入試にも若干の不本意入学者が存在する。詳細な分析結果の提示は省略するが、推薦系入試における不本意入学者は、第一志望が他大学であったパターン（AOおよび学業推薦に比較的多い）と、第一志望が本学の他学科であったパターン（スポーツ推薦、TG推薦に多い）に大別される。

次に、出身高校の特性を検討する。新入生調査では学生の出身高校を「進学校だった（4年制大学志望者がほとんど）」、「どちらかと言えば進学校だった（4年制大学志望者が半分以上）」、「どちらかといえば進学校ではなかった（4年制大学志望者が半分以下）」、「進学校ではなかった（4年制大学志望者はほとんどいない）」「非該当（高卒認定試験合格者の場合）」、という5カ

表４　不本意入学群と本意入学群の出身高校タイプ　　数値：%

	2011 年		2012 年		2013 年	
	不本意	本　意	不本意	本　意	不本意	本　意
進学校	60.7	33.2	61.2	36.2	61.6	31.0
準進学校	28.3	37.1	30.0	35.6	29.0	39.5
準非進学校	7.0	18.9	6.9	17.6	6.0	19.9
非進学校	3.0	10.1	1.5	9.8	3.0	9.0
非該当（大検等）	1.1	0.7	0.4	0.8	0.4	0.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	1315	1637	1228	1501	1146	1585

テゴリーに分類して質問している。不本意入学者群と本意入学者群の出身高校タイプの構成比率を求めたものが表4である。

当然の結果かもしれないが、不本意入学群に進学校出身者が多いことがわかる。このことは、(1) 不本意入学群の第一志望として最も多かったのが国公立大学であった（表2)、(2) 不本意入学率が最も高かったのがセンター試験入試であった（表3)、という結果とも整合的である。

3.3　不本意入学学生と大学生活の展望

では、不本意入学学生は本学に入学したことをどのように評価し、大学生活についていかなる展望を抱いているのであろうか。

まず、所属学科に入学したことの満足度を不本意入学群と本意入学群で比較してみよう（表5)。

表５ 不本意入学群と本意入学群の入学満足度

	2011 年		2012 年		2013 年	
	満足％	％の基数	満足％	％の基数	満足％	％の基数
不本意群	77.6	1302	79.0	1220	77.5	1120
本意群	97.0	1619	96.2	1489	96.3	1559
合計	88.4	2921	88.5	2709	88.4	2679

注)「たいへん満足」と「どちらかと言えば満足」の合計比率

入学満足度は、不本意入学群が70％代後半、本意入学群が90％代後半と総じて高い[4]。とはいえ、不本意入学群と本意入学群の間には20％ポイント程度の差が存在し、当然のことながら不本意入学群の方が低い。

次に、不本意入学学生がこれからの大学生活をどのように考えているかを分析しよう。表6は「大学生活で特に力を入れたいこと」（複数回答：2つまで選択）の回答結果を不本意入学群と本意入学群で比較したものである。

新入生調査は全数調査なので統計的検定を行う必要性は低いのだが、どの項目で二群の間に差があると言えるのかの目安としてカイ二乗検定（両側検定）を行い、5％水準で有意となった項目の数値には下線を付した。

二時点以上で同じ傾向が観測され（つまり、結果に時系列的な一貫性があり)、統計的に有意な結果となったのは、(1)「親しい友人を作る」、(2)「進学・就職のための準備をする」、(3)「クラブやサークルで活動する」、の3項目であった。

表６ 不本意入学群と本意入学群の比較（1）大学生活で力を入れたいこと（複数回答）

数値：%

	2011年		2012年		2013年	
	不本意	本　意	不本意	本　意	不本意	本　意
知識を広げ、教養を高める	34.7	33.4	38.3	35.0	38.7	38.6
専門分野の深い知識や技能を習得する	26.3	26.7	24.3	23.4	27.4	25.3
人生を深く考え、精神的に成長する	4.9	5.4	4.0	5.8	4.6	4.8
経験や見聞を広める	20.6	19.4	19.5	19.1	18.7	20.0
ボランティアなど社会貢献活動をする	1.4	2.0	1.2	1.9	2.7	3.3
親しい友人をつくる	6.9	8.1	5.7	8.3	5.6	8.4
交友関係をひろげ、多くの友人をつくる	15.9	15.8	15.8	17.7	15.4	17.8
進学・就職のための準備をする	33.6	25.8	34.7	26.2	34.1	26.4
自分にあった進路や仕事を見いだす	20.2	25.7	21.1	23.6	19.4	19.9
趣味や好きなことに時間をさく	6.6	5.1	5.2	4.7	3.6	4.7
クラブやサークルで活動する	9.9	14.3	11.4	14.1	11.6	14.0
アルバイトをする	6.8	5.4	5.0	4.8	6.4	4.0
特にない	0.4	0.4	0.8	0.1	0.0	0.0
N	1318	1638	1229	1503	1147	1588

注　1）質問文は文意が変わらない範囲で簡略化した。2）下線のついた数値はカイ二乗検定で有意（$p<.05$）

これら3項目のうち「親しい友人を作る」と「クラブやサークルで活動する」は、不本意入学群の回答比率の方が本意入学群より低い。つまり、不本意入学群は友人関係の構築や学業以外での大学生活の充実に重きを置かない傾向があることがわかる。

一方で、「進学・就職のための準備をする」は不本意入学群の回答比率が高い。ここでの「進学」が具体的に何を意味するのかは残念ながら把握できないが、もしこれが本学からの脱出、すなわち1年後の他大学の再受験や他大学への編入を意味しているとすれば、不本意入学群が友人関係やサークル活動を低く見ていることも頷ける。

以上の結果は、当然といえばそこまでであるが、不本意入学者が脱大学的な志向を有しており、本学での学生生活の適応に消極的であることを示している。

次に大学生活における不安について検討しよう。表7は「これからの大学生活についてどんな不安をもっていますか」（複数回答：2つまで選択）という質問の回答をまとめたものである。

二時点以上で有意な同傾向の結果が得られたのは、(1)「授業についていけるか」、(2)「経済的にやっていけるか」、(3)「大学の雰囲気になじめるか」、(4)「親しい友人ができるか」、(5)「順調に進級・卒業ができるか」、(6)「希望する就職・進学ができるか」、(7)「充実した大学生活が送れるか」、(8)「特にない」の8項目であった。

表７ 不本意入学群と本意入学群の比較（2）大学生活における不安（複数回答）

数値：%

	2011 年		2012 年		2013 年	
	不本意	本　意	不本意	本　意	不本意	本　意
授業にしっかり出席できるか	4.7	5.5	4.3	6.5	7.5	6.5
授業についていけるか	32.8	57.3	33.8	59.1	33.9	58.5
病気になったりケガをしたりしないか	1.3	0.6	1.7	1.1	1.5	1.5
経済的にやっていけるか	10.5	6.6	8.1	6.0	9.3	6.9
規則正しい生活が送れるか	6.1	4.8	6.4	4.9	6.6	5.4
大学の雰囲気になじめるか	12.4	9.2	14.5	9.6	11.6	7.9
親しい友人ができるか	31.0	23.8	32.5	24.2	30.0	25.9
クラブ･サークルでうまくやっていけるか	4.9	5.6	6.8	5.3	6.5	7.0
順調に進級・卒業ができるか	15.8	24.3	14.6	21.9	17.3	23.0
希望する就職・進学ができるか	35.0	25.7	31.7	24.2	31.0	22.2
充実した大学生活が送れるか	22.3	16.8	21.3	16.4	21.0	14.0
特にない	10.8	7.1	8.5	5.2	8.0	4.6
N	1318	1638	1229	1503	1147	1588

注　1）質問文は文意が変わらない範囲で簡略化した。2）下線のついた数値はカイ二乗検定で有意（$p<.05$）

これらのうち、不本意入学群の回答比率が本意入学群よりも低いのは、「授業についていけるか」「順調に進級・卒業ができるか」の2項目となっている。この2つの項目はいずれも学業に関するものであり、この点で不本意入学者の不安感が低いのは出身高校の構成比率（表4）から見て当然であろう。

逆に不本意入学群の回答比率が本意入学群よりも高いのは、「経済的にやっていけるか」「大学の雰囲気になじめるか」「親しい友人ができるか」「希望する就職・進学ができるか」「充実した大学生活が送れるか」「特にない」の6項目である。

表2で確認したように、不本意入学者の多くは国公立大学志望であった。「経済的にやっていけるか」の不安が高いという事実は、不本意入学者が国公立大学を志望した理由が大学の教育レベルだけではなく、経済的な理由も含んでいることを示唆している。

「大学の雰囲気になじめるか」「親しい友人ができるか」「充実した大学生活が送れるか」の3項目は、いずれも大学生活への適応についての直接的な不安の表明である。神永（2008）は、「周囲の学生のレベルが低いので友達ができない」という理由で退学した学生のエピソードを紹介しているが、この3つの項目の不安感の背後に存在するのは、このような不本意入学者の持つ自己イメージ（自分はもっとレベルの高い大学に入れた）と、本学の平均的な学生イメージ（レベルの低い連中）の齟齬なのかもしれない。

不本意入学群において「希望する就職・進学ができるか」の不安が高いのは、先に検討した「大学生活で力を入れたいこと」における「進学・就職のための準備をする」を重視することの裏返しであろう。また、不安が「特にない」と回答する学生も不安群の方が多い。これを自己の能力についての自信の表れとみなすべきか、大学生活に何ら期待していなことへの表れとみなすべきかは、解釈が難しいところである。

3.4　分析のまとめ

ここまでの分析結果をまとめると、以下のようになる。(1) 本学の場合、不本意入学学生は、例年約45％程度存在する。(2) 不本入学学生は進学校出身者が多い。(3) 不本意入学学生は、友人関係の構築をあまり重視せず、自身の進路に関心が高い。(4) 不本意入学学生は、勉学面での不安は小さいが、経済面・大学生活の適応・進路達成に不安を抱えている。

こうした結果は、一般的な不本意入学学生像によく合致するものである。不本意入学者は、進学校出身者が多く、勉学に関する不安が小さいことから、学力的には比較的高い水準にあると考えられる。したがって、そうした学生を大学生活から離脱させることなく着実に育てることは、本学のプレゼンスを向上させる上で――たとえば、学生の平均的な能力水準を高め、就職実績をあげる上で――重要と考えられる。

では、そのためにどうすればいいのか。樋口（2013）によれば、転学意向を有する学生の大学満足度を上げるためには（それはすなわち、満足度の上昇によって学生の転学を思いとどまらせることを企図しているのだが)、「人間関係を活かした学びの促進と共同の実感」および「しっかりとした学びの促進と専門基礎等の成果」が重要であるという。同様に、退学意向を有する学生の大学満足度を上げるためには、「対話を交えた学びなおし」、「学び・協力しあえる友人づくりと共同の実感」および「学び・生活への基礎的態度の育成」が重要とされる（樋口2013)。

ここにあげられたタイプの教育が重要なことは、すでにFD研修等において再三指摘されてきたことである。本学でも、こうした方向で教育活動を強化すべく、カリキュラム改革等の様々な取り組みをすでに行っている。そうした教育改善は、不本意入学者の大学適応においてもまた重要な意味を持つわけである。

4. データの有効活用のために

以上、新入生調査データの簡単な分析を行ったが、残念ながら新入生調査データ単体からはそれほど重要な情報を引き出すことができない。本稿では不本意入学問題を扱ったわけだが、今回のデータ分析から得られたのは、本学に不本意入学者が入学時にどのくらい存在するのか

という実態と、彼ら／彼女らがどのような心理的傾向を有しているかに関しての常識の後追い程度の知見に過ぎない。現在までのところ、新入生調査では学生番号を記入させるなどの形で個人を特定することを行っていないので、この調査における不本意入学者が入学後に実際にどうなっていくのか――たとえば、退学や他大学への編入学に流れる学生、本学に適応して順調な大学生活を送る学生、大学に不適応で不満を抱えたまま卒業まで過ごす学生がそれぞれどのくらいいるのか――を一切知ることができない。

大学が有する学生に関するデータの情報を最大限有効に活用するためには、新入生調査データのような学生生活の節目に行われる意識調査だけでなく、在学中の成績・在籍状況・就職先などの各種データをID（たとえば学生番号）で同定し、学生の入学から卒業までの状況を個人レベルで把握できるデータ（いわゆるパネルデータ）を作成し、分析することが望ましい。これによって、不本意入学学生と本意入学学生では実際の不適応率（長期欠席率や退学率）はどの程度異なるのか、不本意入学者と本意入学者の成績はどう異なるのか、不本意入学学生は結果としてどのような進路を選択したのか、逆に本意入学学生が大学生活で不適応に陥るのはどのような場合か、といったことが分析可能になる。

本学では様々な機会に数多くの調査が行われているが、得られたデータを蓄積し、それらを相互にリンクすることで有益な情報を引き出すという視点が決定的に欠けている。各種調査の実施担当者・担当部署が異なり、その間での連携がないことがその原因と考えられる。また、各種調査データに対しては度数分布表レベルのごく単純な分析しかなされておらず、こうした状態が続くとすれば、それは人員・労力・資金・資源の無駄遣いになりかねない。

近年、ビジネス関連書籍では空前の統計学ブームが起きており、数多くの統計学入門書が出版されている。そうした入門書で解説されている手法や考え方の多くは決して高度なものではないが、本学の各種調査データの利用状況は、そうした入門書で解説されている内容に照らしても浅いレベルにとどまっている。高等教育機関として、この状況は恥ずべきものであり、大いに危機感を持つ必要があるだろう。ビジネス関連の統計学入門書では、統計学やデータの有効活用法は「これからの時代を生き抜くための必須技術」と位置づけられることが多いが、これは大学にとっても全く同様である。

参考文献

樋口健. 2013.「大学1年生の転学・退学の意向とその処方箋」ベネッセ教育研究所
http://berd.benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity3/　（2013年12月18日取得）

神永正博. 2008.『学力低下は錯覚である』森北出版.

小林哲郎. 2000.「大学・学部への満足感」小林哲郎・高石恭子・杉原保史（編）『大学生がカウンセリングを求めるとき』ミネルヴァ書房　所収

---

[1] 2010年度データを除外したのは、データが通常の統計ソフトウェアで処理可能な形で作成されておらず、分析が困難なためである。新入生調査データは、すべてエクセルファイルで提供された。このうち2010年度データはすべての回答が数値ではなく、テキストで（選択肢の語句そのままの形で）入力されていた。これを通常の統計分析ソフトウェアで扱えるデータ形式に変換する作業には膨大な労力と時間を要するため、使用を断念した。2011年度以降のデータも、複数回答がエクセルの1つのセルに収録されており（例：［1,2,3］のように入力されている）、このデータを標準的な複数回答のデータ形式に変換するためにかなりの手間と時間を要した。データ作成および処理を担当した業者に確認したところ、このような扱いにくいデータを納品したのは「そのような形式で納品するよう、大学側から指示があったから」とのことであった。

[2] 新入生調査では「本学を受験した理由」（複数回答）を質問しており、その中には残り4つの不本意入学類型に対応する項目も含まれているので、不本意入学群をさらに詳細に分類することも可能である。これについては今後の課題としたい。

[3] 具体的には、資格取得推薦、キリスト者等推薦、文化活動推薦、帰国生特別入試、社会人特別入試、外国人留学生特別入試等である。

[4] 第1節で触れた「第2回大学生の学習・生活実態調査」では、転学意向のある学生の大学満足感は45％、退学意向のある学生の大学満足感は35％となっている（樋口2013）。